

## 〈書評〉

# 藤本憲信著 『熊本県菊池方言の文法』

坂口 至

本書の著者藤本憲信氏は、長年熊本県の高校教育に携わり、校長職を最後に定年退職した後、本学の大学院に再入学し、国語学専攻の課程を修了した篤学の人である。修士論文は、国学院大学卒業時以来の研究課題であった上代語の表記に関するもので、一千枚を優に超える力作であったが、このたび、郷里の菊池地方（熊本市の北に位置する）の方言についての二段組み四百頁に及ぶ本書を手にして、氏の学問に対する情熱のほとばしりに、あらためて深く感動せざるを得なかった。

本書は、「熊本県菊池市に伝わる、昭和十年代から現代に至るまでの郷土の言葉を対象とし、旧来の文法方式に従って、体系的な記述を展開したもの」（例言）で、次のような構成になっている。

- 序章 菊池方言文法の概観
- 第一章 体言論
- 第二章 副用語論
- 第三章 用言論

## 第四章 助動詞論

## 第五章 助詞論

## 第六章 敬語論

## 終章 —あとがきに代えて—

以下、章立てに従って内容を見ていく。菊池市およびその方言文法の概要を述べた序章のあと、第一章「体言論」では、「体言の語尾屈折」「体言の提示」「音節名詞」「代名詞の多様性」の四項目について記述する。「体言の語尾屈折」は、「限府（ワイフ）地名」イ行ク（限府ニ行ク）のような体言に助詞等が接続する場合の音変化の例、「体言の提示」は、「富士山ナウツクシカナ」のようないわゆる連声の例、「音節名詞」は、その長音化現象を扱っており、体言そのものの問題というより、形態と音韻の相関の問題として考えるべき事柄である。豊富な用例で、当地方言の実態がよく示されているが、「体言の語尾屈折」において、「限府（ワイフ）地名」イ行ク（限府ニ行ク）のような音変化を、印欧語に見られる屈折と同様の現象とし、

「限府二行ク」からの変化ではないとする点は賛同できない。このような音変化は、鹿児島方言を筆頭に、九州各地で見られるものであるが、格助詞二の子音nの弱化、脱落で法的に説明できるものである。印欧語の屈折に類するものとすれば、その屈折のメカニズムが説明されなければならないが、この場合ちょっと無理なのではないだろうか。

第二章「副用語論」は、「感動詞」・「接続詞」・「副詞」・「連体詞」を扱う。これらの多様な俚言に対して、ネイティブならではの細かな意味、用法の記述がなされており、副詞や連体詞の説明では古語や歴史的方言との関連にも意を用いて、中身の濃い記述になっている。

第三章「用語論」は、「動詞」・「形容詞」・「形容動詞」について記述する。まず動詞では、当地方言の活用型を基本的に五段・下二段・カ変・サ変の四種類と認定し、それぞれの活用形と所属語彙について詳説する。五段活用の中には、上二段（一段）出自の「起きる」や「落ちる」が含まれているが、特に連用形に「起キッタ」や「落チッタ」が現れるのが、鹿児島方言など南部九州方言との関連が窺えて興味深い。下二段活用は古典文法の名残りとして、九州各地に根強く分布するが、著者は当地の高校生を調査して、八十%以上の高校生が共通語と同じ下二段活用を用いており、特に女子の使用率が高いことを明らかにしている。動詞の活用形では、五段活用連用形の音便形が、特に九州方言の特徴として注意されるところであるが、本書で

も用例を多く挙げて説明している（第五章「動詞」の接続助詞の項目でも再び詳しく触れている）。ただ、評者のように、国語史（中央語史）との関連に興味のあるものにとつては、特にサ行の音便やバ・マ行の音便の実態が気にかかるところである。すなわち、前者においてはイ音便を起す語と原形のままの語、後者においては、ウ音便を起す語と撥音便となる語に分かれるが、その傾向が当地方言ではどのように現れるのかが知りたるところであるが、その観点からの分析が不十分なのが残念である。なお、九〇頁以下に各種の活用表が挙げられているが、例えば「書ク（なら）」「書イ（た）」を仮定形としているのも気になった。記述文法としては、仮定法（仮定表現）と仮定形はやはり区別すべきであろうと思う。次に、「形容詞」「形容動詞」については、いわゆるカ語尾とイ語尾の併用の実態と、カ語尾の造語力について、実例を多く挙げて記述しており、非常に有用である。

第四章「助動詞論」では、受身・可能・自発・尊敬、使役、否定、意志・推量などの主要な助動詞の用法を詳述する。全体として見れば、他の熊本県内方言や肥筑方言と共通性が高いと言えそうであるが、例えば上二段（二段）動詞に下接する意志・推量の助動詞のウの用法では、一方で「見ユウ」と「見ロウ」が共存し、一方では「落チユウ」は無く、「落チロウ」のみであるという事実の指摘や、断定の助動詞「ダ」と「ジャ」について、前者が菊池市中心部、後者が周辺部に分布するとい

う指摘など、他の研究者（もちろん評者も含めて）のさらなる調査意欲をかき立てる興味ある記述が多い。

第五章「助詞論」は、疑いもなく本書の中心をなす章である。頁数としても章立ての中で最大であるが、内容の濃さから言っても、他の章を圧していると思う。それは、当地方言の助詞が、種類も用法もいかに多彩・多様であるかを示していることに外ならない。中でも、副助詞と終助詞は、本書で初めて詳しい記述がなされたものが少なくない。副助詞の「ナシヨ」「ヨロ」、終助詞の「パウ」「タウ（ダウ）」「ナウ」「ザウ」「ガイ」「カウ（コウ・コ）」などがそうである。さらに、命令表現に用いられる「イ」「サイ」「シ」は、中世京都語との繋がりが濃厚であるが、これらも他の肥筑方言ではあまり記述されていないものである。いずれにしても、評者の頭にあつた菊地方言と熊本市方言との相似性は、こと助詞に関しては大幅に修正せざるを得なくなつたことを告白しなければならぬ。その他、「パツテン」「バイ」「タイ」など、おなじみの助詞についても怠り無く記述しており、その意味・用法の分析も穏当なものである。強いて一、二気になる点を指摘するとすれば、熊本市方言にも見られる終助詞「ボ」「ポー」について、「ボはパウの単母音短音化、ポーはその長音化である。」（二四七頁上段）と述べるが、音声変化としては「ポーはパウの融合長音化、ボはその短音化である。」とすべきであろう。このような、語形変化のプロセスに関するやや軽率な記述が散見するようである。なお、「ポー」の由来に

関しては、『ロドリゲス日本大文典』が載せる「パウ」邦訳本六〇九〜六一〇頁）との関連に触れる必要があつたかもしれない。

最後の第六章「敬語論」については、熊本市方言との共通性が高いようだという印象のみを記して、細かい点は省略したい。以上、本書の内容を大雑把に紹介し、若干の批評を試みた。方言語形の変化、特に音声面の変容にかかわる記述には、やや慎重さを欠く点も見られたが、本書の価値はそれらによつていさかも減ずることはない。方言に深い愛情を持ち続けるネイティブにしかできない、詳細・緻密な分析、記述が全編に溢れているのである。

本書は、熊本県内に限らず、九州における特定地点の伝統的技法を記述したものとしては、これまでで最も大部・詳細なものである。本書中には、今後の伝統的九州方言の文法研究に示唆を与えてくれる記述がちりばめられている。本書が、方言に興味をもつ多くの人に読まれることを望み、また著者には、今後音声や語彙も含めた菊地方言の集大成を成し遂げられることを期待したい。

（平成十四年（二〇〇二年）六月）

熊本日日新聞情報文化センター刊 三九九頁 三〇〇〇円）

（さかぐち いたる／本学文学部）